



身体メタファーに見る自己理解

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2007-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): metaphor, metonymy, body parts, conceptual metaphors, conceptualization 作成者: 橋本, 邦彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/96

身体メタファーに見る自己理解

その他（別言語等） のタイトル	The Self-Understanding in Body Metaphors
著者	橋本 邦彦
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	52
ページ	23-31
発行年	2002-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/96

身体メタファーに見る自己理解

橋本 邦彦*1

The Self- Understanding in Body Metaphors

Kunihiko HASHIMOTO

(論文受理日 平成14年 8月30日)

Abstract

The purpose of this paper is to clarify how we experience and understand ourselves by investigating the conventional metaphors in English which use words referring to parts of the body. The consideration indicates that a certain number of conceptual metaphors, which manipulate conceptualizations in cognition, work on various body-part metaphors as their frameworks.

Keywords: Metaphor, Metonymy, Body Parts, Conceptual Metaphors, Conceptualization

1 身体的経験と慣用メタファー

私たちは漠然と心(mind)は身体(body)よりも優れていると考えがちである。哲学の伝統的な心身問題では、心は感じたり考えたりする心的過程を内的に意識するのに比べ、身体は科学的法則に従って機械論的に説明できる物質世界に属するものとして扱っている。この考え方は、フランスの哲学者デカルト(René Descartes, 1596-1650)の心身二元論(mind-body dualism)から深い影響を受けている。

デカルトは世界的一切を疑う「誇張懷疑」の果てに、懷疑の根底に横たわる自己と出会う。⁽¹⁾「我思う、ゆえに我あり(cogito, ergo sum)」という有名な言葉は、あらゆる物質性から独立した存在

である「私」という自己の存在を高らかに謳いあげている。一方、身体はと言えば、延長という本質を備えた機械的な物体にすぎないのである。

考える実体としての心は物体としての身体を支配し思うままに操作するが、身体は心に対して積極的な働きかけをすることができない。心と身体とのこの一方向性こそ、デカルトの思想の特徴であると同時に限界でもあるのだ。

心さえあれば身体は不要なのだろうか。身体は心の従属物にすぎないのだろうか。この間にはっきり「否」と答えたのは、ダマシオである。⁽²⁾ダマシオは、病徴不覚症患者が自分の置かれている状況全体に対し関心を示さず、表にあらわす情動もなく、問うとわかる感情ももたない事実に気づいた。自己イメージが著しく弱いのである。⁽³⁾ダマシオは病徴不覚症患者の特異な症例から、「からだがなければ心もない」という結論を引き出す。有機体としての人間は、全体として、身体と脳と

*1 共通講座

の活動によって自己を構築するというのである。デカルトの考えるような、疑いを通しての捨象の後に残る、単一で不動のア・プリオリな自己など存在しないのである。まず、身体と脳が見える実体として存在し、両者の多様な相互作用によって機能的に構築されていくところに、自己の真の姿があるといっている。

心に対する身体の重要性は、ピアジェでも指摘されている。⁽⁴⁾ ピアジェによると、生後18ヶ月までの幼児は、思考を構築していく過程で、空間領域やその他の知覚領域において、すべてのものを自分の身体に関係付ける。身体があって、考える自己が確立されていくのである。

デカルト以来の心と身体とを別個の実体として分け、心の身体に対する優位性を主張する考え方は、脳科学、心理学などの分野から否定されつつある。むしろ、心と身体は分離不可能な一つのものであり、心こそ脳を含む身体の働きによって生まれる機能実体であるとするのが真実に近いように思われる。

身体的経験が言語能力の発達と表現形式に決定的な影響を及ぼすと仮定するのが、1970年代後半より台頭してきた認知言語学(cognitive linguistics)の立場である。⁽⁵⁾ なるほど、言語能力は遺伝子に組み込まれ、脳の特定領域を占める生得的な能力ではあるが、それが健全に働くためには、身体的経験に根ざした情報が必要不可欠である。私たちが世界をどのようなものとして認識しているのかを反映する形で、言語能力は形成されていくのである。

日常の身体的経験をいかに取り込み認知処理しているかを指し示す言語表現にメタファーがある。メタファーは、佐藤(1978)が規定するように、「ある物事の名称を、それと似ている別の物事を表すために流用する表現法」で、伝統的にはレトリック(修辞法)の技法の一つと考えられてきた。⁽⁶⁾ レイコフ&ジョンソン(1980)は日常用いられる慣用メタファー、たとえば、「議論を粉砕する、議論に勝つ、議論を撃破する」の動詞部分は、具体的行為の世界の経験が思考の世界に投影されて新たな概念構造を作り上げた結果をあらわすと述べている。⁽⁷⁾ 彼らは数多くの慣用メタファーの根底に同様の原理が働いている事実を突き止め、メタファーの本質を「ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験すること」と定義する。⁽⁸⁾

メタファーが心の思考プロセスの中核を形作る

のだとしたら、身体部位を用いた慣用メタファーを分析する作業から、人間が自らをいかに経験し理解しているのかが明らかにできるのではないだろうか。

以下で、主に、英語の身体部位に関わる慣用メタファーを取り上げ、一見、多種多様に見える表現の根底には、限られた数の概念化が働いている事実を明らかにし、それに基づいて、人間の自己理解の実相に迫ってみたい。

2 英語の身体メタファーの考察

身体のイメージは、一般に、垂直の姿勢である。上から、頭、首、肩、胸、背、腕、足がある。頭には、顔、目、耳、鼻、口がある。身体は、もちろん、見える部位にとどまらない。脳、内臓、血管など見えない部位も身体構成上重要である。本稿では、紙幅の都合により、可視的な主要部位のメタファーに絞って論じていく。

2.1 からだ/肉体(body/flesh)

プラトン以来、身体は魂を閉じ込める容器と考えられてきた：THE BODY/FLESH IS A CONTAINER.

(1) He just lives to scrape enough to keep his soul in his body.

「彼は生きるのに(からだの中に魂をとどめておくのに) やっと足りるほどの金をかせぐために生きている。」

身体に入っているのは魂だけではない。(2a)の感覚(feeling)や(2b)のとげ(thorn)の場合もある。

(2) a. I don't have the feeling for Central Asian music in my body.

「中央アジアの音楽は私の肌合わない。」

b. You can imagine what a thorn in the flesh, I am to him. <T: 98>⁽⁹⁾

「私が彼にとってどんな悩みの種か想像できるでしょう。」

身体は個々の部位が集まって一緒に働くので、特定の仕事を協同行うグループや組織に見立てられる。これは機能に着目したメトニミーである：THE BODY/FLESH STANDS FOR AN ORGANIZATION.
(10)

(3) He has set up a body called the Security Council. <D:1>

「彼は安全保障理事会という組織を設立した。」

2.2 皮膚(skin)

身体を覆う皮膚は、包み込むものとして、容器のイメージをもつ：THE SKIN IS A CONTAINER.

(4) This made them all jump out of their skins with fright.

「これには全員びっくり仰天した（皮膚の中から飛び出た）。」

皮膚は身体を保護するので、大切に守るべき貴重品である：THE SKIN IS A VALUABLE POSSESSION.

(5) You always try to save your skin at other people's expense.

「君はいつだって他の人を犠牲にしてわが身を救おうとする。」

2.3 頭(head)

頭は身体が一番上にあり、脳、目、耳、口のような大切な認知器官を含んでいる。それゆえ、機能に着目すると、グループや組織を率いる人、あるいは、思考の働きをメトニミ的に表す：THE HEAD STANDS FOR A LEADER/THOUGHT.

(6) a. There were several international meetings with heads of state in Kyoto.

「京都で国家首脳たちとの国際会議がいくつもあった。」

b. I have no head for figures.

「私は数字に弱い。」

頭は容器に見立てられる：THE HEAD IS A CONTAINER.

(7) Brendan is very good at carrying numbers in his head. (CIDE)

「ブレンダンは数字を記憶するのが大得意です。」

頭は取り外しのできる所有物である：THE HEAD IS A DETACHABLE POSSESSION. 過度の働きかけがあれば(8a)のようにはずれてしまうし、しっかり締め付けてあれば(8b)のように正しい判断ができる。

(8) a. The dog barked at us his head off.

「その犬は私たちに激しく（頭がとれるほど）吠えた。」

b. She's got her head screwed on the right way.

「彼女は分別がある（頭をしっかりとねじで締め付けている）。」

同様の理解の仕方では、頭は貴重な所有物である：THE HEAD IS A VALUABLE POSSESSION. ちゃんと保持していればあわてないが、失くしてしまうとあ

わてる結果になる。

(9) a. Tuppence, though utterly taken aback, nevertheless, kept her head. <T: 164>

「タプンスはすっかり不意を打たれたが、それでもあわてなかった。」

b. Even though they were under threat, they didn't lose their heads. <CIDE>

「たとえ脅されていても、彼らはあわてなかった。」

頭は出発したり到着したりする場所として捉えられる：THE HEAD IS A LOCATION.

(10) a. The gin all the guests had drunk went their heads.

「飲んだジンにお客はみな酔っ払った。」

b. I'm going off my head for someone to talk to in this place. <T: 157>

「ここにいると、誰か話し相手が欲しくて、私は気が狂いそうです。」

(10a)のジンは頭という場所に到達することで人を酔わせ、(10b)の私は自分の頭という場所から立ち去ることで、気が狂ってしまうのである。

2.4 顔(face)

顔は様々な形（表情）に加工して身に付けるものである：THE FACE IS AN OBJECT TO PUT ON.

(11) a. He did his best to put on a brave face. <D: 3>

「彼は平気だという顔をしようとした。」

b. She wore a long face when she learned the bad result.

「悪い結果を知って彼女は失望の表情を浮かべた。」

(11a)では「勇敢な顔」を、(11b)では「長い顔」を、それぞれ身に付けている。

顔はまた大切な所有物である：THE FACE IS A VALUABLE POSSESSION.

(12) a. They ran away from the problem, hoping it will disappear of its own accord, lying to save face. <D: 2>

「彼らはその問題から逃げ、一人で解消するものと願い、必死に体面を取り繕おうとする。」

b. He thinks he would lose face if he admitted the mistake. <CIDE>

「彼は過ちを認めたら面目を失うだろう。」

2.5 目(eye)

顔の中で一番注意を引くのは、目である。英語にとどまらず、どの言語でも目に関する慣用メタファーは数多くある。⁽¹¹⁾これは、周囲の世界の対象物を見たり判断したりする目の機能が、知覚認知の中核を占めると考えられるからであろう。

(12)

目は容器としてイメージ化できる：THE EYE IS A CONTAINER.

(13) a. I could see the fear in his eyes.

「私は彼の目の中に恐怖心を見ることができた。」

b. She couldn't get the fear out of her eyes.

「彼女は目から恐怖を取り去ることができなかった。」〈Lakoff & Johnson 1980: 50〉

容器に入り口だけでなく出口も付けると、導管になる：THE EYE IS A CONDUIT.

(14) You see London through the eyes of a tourist. 〈D: 3〉

「観光客の目でロンドンを見なさい。」

(14)は視線が目という導管をくぐり抜けて対象に向かうイメージである。

目は着脱可能な対象物である：THE EYE IS A DETACHABLE OBJECT. これは、視線が注がれることを見ることを表すメトニミーに支えられている：THE EYE STANDS FOR SEEING.

(15) a. Keep an eye on that woman.

「その女を監視していなさい。」

b. I can't take my eyes off that woman.

「私はその女から目を離すことができない。」

目は移動する対象物である：THE EYE IS A MOVABLE OBJECT.

(16) a. She never moves her eyes from his face.

「彼女は彼の顔から目をそむけなかった(彼の顔から目を移動させなかった)。」

b. She ran her eyes over everything in the room. 〈Lakoff & Johnson 1980: 50〉

「彼女は部屋中のあらゆるものに目を走らせた。」

移動する目は、経験、知識を積んで評価したり、判定したりする能力を養う生き物として理解される：THE EYE IS A CREATURE.

(17) It takes looking at a lot of good works to develop an eye for paintings.

「絵画に対する確かな目を養うには、良い作品をたくさん見ることだ。」

目は、事態が向かうべき場所である：THE EYE IS A LOCATION TO HEAD FOR. 事態が目飛びつけば視野に入り、一目瞭然のものとなる。

(18) The true explanation leapt to the eye, didn't it?

「本当の説明はすぐにわかったんじゃないの。」

2.6 耳(ear)

聴覚は視覚と並ぶ際立った知覚である。言葉や音を聞くことで、事態を把握し、推論したり判断したりし、その結果、理解へと至る。耳は聴覚を司る器官なので、聞くことのメトニミーになる：THE EAR STANDS FOR LISTENING.

(19) I'm all ears- tell us what they had to say. 〈CIDE〉

「私はちゃんと聞いているよ。彼らが言わなければならなかったことを話してくれ。」

耳は容器で、その中に入ってくれば聞けるが、出て行けば聞こえなくなる：

THE EAR IS A CONTAINER.

(20) If I have to listen to something I don't understand, it just goes in one ear and out the other.

「理解できないことを聞かねばならないのなら、片方の耳に入って、もう片方の耳から出て行くばかりだ。」

(19)、(20)の根底には、〈聞くことは理解すること(LISTENING IS UNDERSTANDING)〉という概念化が働いている。

耳は或るものがよって立つ場所である：THE EAR IS A LOCATION.

(21) The latest album of *The BEE GEES* set the music world on its ear.

「ビー・ジーズの最新のアルバムは音楽界を仰天させた。」

耳はまた所有物でもある：

THE EAR IS A POSSESSION. その質が良ければすぐれた能力を保証できるが、悪ければなす術がない。

(22) a. He has always had a good ear for a tune. 〈D: 6〉

「彼はいつでもメロディーを聞き分けることができる(良い耳を持っている)。」

b. He will turn a deaf ear to my appeal.

「彼は私の訴えに少しも耳を貸そうとは

しない（つんぼの耳を向けてくる）。」

2.7 鼻(nose)

鼻は嗅覚を司る器官である。これを持っていると、秘密などを本能的に嗅ぎつけるのがうまくなるし、持っていないと、発見したり見つけたりすることが困難になる：THE NOSE IS A POSSESSION.

(23) a. He had a nose for trouble and a brilliant tactical mind. <D: 5>

「彼は面倒事をよく嗅ぎつけ、すばらしい駆け引きができた。」

b. He has no nose for direction.

「彼は方向音痴だ。」

(23)には、メトニミー<鼻でにおいを嗅ぐことを表す(THE NOSE STANDS FOR SMELLING)>も働いている。

鼻を機能ではなく形状から見れば、顔の平面に突き出した棒状の物体である。これが、或る事態に突き刺されば「干渉したり、口出ししたり」することになるし、外に出したままでいれば「干渉せず、口出ししない」ことになる：

THE NOSE IS A PROJECTING OBJECT.

(24) a. You always poke your nose into her affair.

「あなたはいつだって彼女のことに口出ししてくる。」

b. I want you to keep your nose out of it.

「私はそれに口出ししないでもらいたい。」

鼻は両端に穴の開いた導管と考えられる：

THE NOSE IS A CONDUIT.

(25) She paid through the nose for these jewels.

「彼女はこの宝石に目の玉の飛び出るほど金を支払った(鼻を通り抜けて払った)。」

鼻は突き出ている目印となりやすいので、物事を見たり判断したりする際の基準点になる：THE NOSE IS A REFERENCE POINT. 基準点は、場所の一種とも言えよう。

(26) a. Most politicians cannot see beyond the end of their noses.

「たいていの政治家たちは先を見通すことができない(鼻の端の向こうを見ることができない)。」

b. All my friends used to look down their noses at me in my childhood.

「子供時代に、友人たちはみな私を見下していた。」

2.8 口(mouth)

口は機能の点から話すことと結びつく。

(27) She had a big mouth.

「彼女はおしゃべりである。」

(27)は、THE MOUTH STANDS FOR SPEAKINGというメトニミーとTHE MOUTH IS A POSSESSIONという概念メタファーに支えられている。

口は食物を摂取する形状から、容器になぞらえられる：THE MOUTH IS A CONTAINER.

(28) a. You took the words out of my mouth.

<T: 211>

「きみはぼくの言おうとしていたことを先に言った(ぼくの口から言葉を奪った)。」

b. What's the matter? You look down in the mouth.

「どうしたの。がっかりしているみたいだね(口の中を下降して)。」

モンゴル語にも似た表現がある。

(29) Dorzh tednij am-iyg tagl-

ドルジ：[主格] 彼らの 口-[対格] ふたを

aad butsaa-zhee.

する-[完了連結] 戻す-[完了過去]

「ドルジは彼らに口止めさせて(口にふたをして)戻した。」

2.9 舌(tongue)

舌は発声器官である。これを所有していれば、(30a)の「おしゃべり」を意味し、失くした後見つけければ、(30b)のように再びしゃべれるようになる。ただし、(30c)のように失くすと、しゃべられなくなる：THE TONGUE IS A VALUABLE POSSESSION.

(30) a. His wife has a tongue on her.

「彼の女房はおしゃべりだ。」

b. I found my tongue.

「私はやっと口がきけるようになった。」

c. The girl has lost her tongue because of a terrible shock.

「少女はひどいショックで口がきけなくなってしまった。」

舌は、時として危険なものになる：THE TONGUE IS A DANGEROUS OBJECT.

(31) a. Watch your tongue!

「口に気をつけなさい。」

b. He gave tongue, his voice sharp and anguished. <T: 290>

「彼はかん高い苦しげな声でわめいた。」

危険だから、(31a)のように見張ったり (watch) しなければならない一方、(31b)のように与える (give) と取り返しのつかないことになる。

舌は絶えず動く生き物である：THE TONGUE IS A CREATURE. それを黙らせるには「おさえこんでおく (32a)」し、しゃべらせるには「解き放つ (32b)」必要がある。

(32) a. Hold your tongue!

「だまれ。」

b. The wine loosened his tongue.

「ワインの酔いがまわって、彼はべらべらしゃべり出した。」

2.10 首 (neck)

首はある程度の長さがあり、頭を前後左右に動かせるため、可動性がある。この身体経験から、首は変形するものであるというメタファーが生じる：THE NECK IS A FLEXIBLE OBJECT. (33a)では首は何かに向かってつきだして (stick out) いるし、(33b)では長く伸ばして (crane) いる。

(33) a. I want you not to stick your neck out in getting involved with the cult.

「きみにカルト集団とかかわり合いになって危ない目にあって欲しくないんだ。」

b. Here's the letter I have been craning my neck for. <T: 221>

「首を長くして待っていた手紙が来た。」

首は何かよくないものを入れる容器である：THE NECK IS A CONTAINER. (34a)では痛み (a pain) が入っており、(34b)では特定されない悪いこと (it) が中に入れられる。

(34) a. That child is a pain in the neck. <CIDE>

「その子はうるさい。」

b. I wish I'd been the one to get it in the neck. <T: 222>

「罰を受けるのが私だったらよかったのに。」

2.11 肩 (shoulder)/胸 (chest, breast)/背 (back)

肩、胸、背は、人間の上半身を構成する主要な部位である。それらは、否定的なものを取り除いたり、反対に、やっかいなものを置く場所として捉えられる：THE SHOULDER/CHEST/BACK IS A LOCATION.

(35) a. I got the secret off my chest.

「私は秘密を打ち明けてさっぱりした。」

b. They don't want us to get off their backs on sexual harassment.

「彼らはセクハラのことと私たちにとやかく言って欲しくないんだ。」

c. The hopes of the nation are on his shoulders. <D: 7>

「国民の希望は彼の双肩にかかっている。」

背は移動する対象物である：THE BACK IS A MOVABLE OBJECT. 本来相手の裏側の目に触れられない背を見える位置に移動させると、その相手を見捨てる意味になる。

(36) I will never turn my back on my friends.

「私は決して友に背を向けたりしない。」

胸は新たに作る容器であって、汚れがなければ隠し立てできるものは入っておらず、「すっかり打ち明けて話す」結果になる：THE BREAST IS A NEWLY-MADE CONTAINER.

(37) When he was shown proof that he stole the money, he made a clean breast of it.

「金を盗んだことの証拠を見せられて、彼はすっかり白状した。」

2.12 手 (hand)

英語では手 (hand) は手首から先の部分を指示し、技量 (skill) とか手並み (style of workmanship) などの機能をクローズアップさせる：

THE HAND STANDS FOR A SKILL.

(38) I'm trying my hand at translating a novel.

「私は試しに小説の翻訳をやってみるつもりです。」

手は可動性に富み、貸したり、与えたり、回したりできる：THE HAND IS A MOVABLE OBJECT.

(39) a. He gave me a hand in doing my homework.

「彼は私の宿題をするのを手伝ってくれた。」

b. I took an active hand in this project.

「私はこのプロジェクトに積極的に関わった。」

c. She can turn her hand to many new things.

「彼女はたくさん新しいことにとりかかることができます。」

(39a)では手を誰かに与えることが「手伝う」ことになり、(39b)では何かに手を入れてあげることが「関わる」ことになり、(39c)では何かに手を回すことが「着手する」ことになる。

可動性のある手が一つところにとどまって状態

化すると、所有物と見なされるようになる：

THE HAND IS A POSSESSION.

- (40) The president has accused these people of having a hand in the killing. <D: 10>
「大統領はその連中を殺人に参与したとして告発した。」

手は広げた形から、何かを置く場所になぞらえられる：THE HAND IS A LOCATION.

- (41) During long hours when Paul was at the Courtauld [Institute] or the British Museum Dora found time on her hands. <T: 136>

「ポールがクールトー研究所かブリティッシュ・ミュージアムに出かけている長時間のあいだ、ドーラは時間をもてあましていた（手の上で時間を見つけた）。」

手は指を曲げてくぼみを作ると、三次元的な容器になる：THE HAND IS A CONTAINER.

- (42) a. I took my courage in both hands.
「私は思い切ってやってみた（両手の中に勇気を収めた）。」
- b. You shouldn't take the law into your own hands.
「あなたは勝手に私的制裁を加える（法律をあなた自身の手の中へ引き入れる）べきではない。」
- c. The demonstration against the government was gradually getting out of hand.
「反政府デモはしだいに手に負えなく（手から出て）なってきた。」

(42a)では容器の中にある状態、(42b)では容器の中へ入る状況、(42c)では容器の中から出る状況を、各々、表している。

2.13 足(leg, foot)

英語では、腿からくるぶしまでをleg、くるぶし以下をfootと呼ぶ。ちなみに、日本語では、両者をあわせて「足」と言う。足は身体を支える働きから、なくてはならない所有物と受け取られる：THE FOOT/LEG STANDS FOR SUPPORTING; THE FOOT/LEG IS A VALUABLE POSSESSION.

- (43) a. I think you've got your feet on the ground. (T: 108)
「あなたは足が地についた考えもできると私は思っている。」
- b. You have no leg to stand on.
「あなたには弁解の余地がありません

(立つべき足をもっていない)。」

- c. We have to find our feet somewhere as soon as possible.

「私たちはできるだけ早くどこかに落ち着かなければ(足を見つめる)ならない。」

モンゴル語には所有物の足をなくすと、地に足がつかないほど高揚した気分になるメタファー表現がある。

- (44) Naiz-aa üz-eed ter xöl
友人-[再帰] 会う-[完了連結] 彼は 足
ald-a-zh baj-na. ⁽¹³⁾

失う-[挿入]-[未完了連結] いる-[現在]

「友人に会って、彼はルンルン気分である。」

この所有物は、見つけたり、失くしたりできるのだから、可動物である：THE FOOT/LEG IS A MOVABLE OBJECT. (45a)のように前方へ置いたり、(45b)のように上方へ上げたり、(45c)のように下方へ下ろしたり、(45d)のように引っ張ったりできる。

- (45) a. Put your best foot forward, and you can overcome your problems.
「全力をつくしなさい。そうすれば、問題を克服できるよ。」
- b. My room isn't really a suitable place to just put your feet up and read.
<T: 113>
「私の部屋は、くつろいで読書するには実のところふさわしくない。」
- c. I put my foot down when she started to smoke again.
「彼女が再びタバコを吸い出したとき、私は断固とした態度に出た。」
- d. They always pull your leg.
「彼らはいつだってきみをからかうんだ。」

3 概念メタファーと身体としての自己理解

一見多様に見える英語の身体部位を用いた慣用メタファーは、実は、限られた数の概念メタファー(conceptual metaphors)に基づいて体系的に生成されていることがわかる。概念メタファーは、概念に一定の構造を与えるのだから、私たちが自らの身体部位をどのように概念化し、認知しているかを知る重要な手がかりを提供してくれる。

第2節で観察した身体部位に関するメタファーから、次のような共通する概念メタファーを検出

することができる。

(46) 英語の身体部位慣用メタファーの生成に関わる概念メタファー

- a. 容器 (10 部位) : 身体、皮膚、頭、目、耳、鼻、口、首、胸、手
- b. 所有物 (8 部位) : 皮膚、頭、顔、耳、鼻、舌、手、足
- c. 可動物 (6 部位) : 頭、目、首、背、手、足
- d. 場所 (5 部位) : 頭、目、耳、鼻、手
- e. 生き物 (2 部位) : 目、舌
- f. その他 (各 1 部位)
 - ①リーダー : 頭
 - ②身に付けるもの : 顔
 - ③突起物 : 鼻
 - ④危険物 : 舌

(46a)の容器が一番多いのは、私たちが日頃、身体部位を三次元的に理解していることを示す。身体全体(皮膚を含む)だけでなく、上半身を構成する部位に集中している。(46b)の所有物は、大切なもの、貴重なもの、必要不可欠なもののみなされる。(46c)の可動物は、身体部位の可動性に根ざしている。ただし、着脱可能なもの(頭、目、手)と固定した上で一定の動きをするもの(首、背、手、足)とに分類できよう。この中には、双方に分類できる「手」のような部位もある。(46d)の場所としての概念化は、身体部位を二次元的な平面と捉えていることを示唆する。可動物に生命が吹き込まれると、(46e)の生き物になる。目は中心的な知覚の一つ視覚を司り、舌は言葉をあやつる器官であり、共に自立した実体として意識し易い。(46f)の4つの項も、日常の身体経験から得ることのできる見立てであろう。たとえば、②「身に付けるもの」は、状況に応じて変化する表情と仮面との連想から、④「危険物」は、当該の部位から紡ぎだされる言葉の毒性から、おのおの、概念化できる類のものである。

(46a-f)の概念メタファーをさらに包摂する上位概念メタファーが存在する。それは、<身体部位はものである(EVERY BODY PART IS AN OBJECT)>というメタファーである。心と身体には上下の優劣関係のないことを第1節で指摘したが、心を産み出す身体部位であるはずの脳は、その他の部位を「もの」と見なすことで、自らの優位性を保持しようとしているかのような印象を受ける。そうは言っても、私たちの日常経験では、身体はモノ的な実体、しかも、快・不快などの感覚を備え

たやっかいな実体であることもまた真実なのである。

もう一つ留意すべき点は、各部位の共通項としての概念メタファーには、機能と結び付いたメトニミーが必ず随伴していることである。たとえば、耳は、容器、所有物、場所の概念メタファーによって生成される慣用メタファーをもっているが、これら三つの概念メタファーを横断する形で、<耳は聞くこと/理解することを表す(THE EAR STANDS FOR LISTENING/UNDERSTANDING)>という、機能に焦点を当てたメトニミーが関与しているのである。このように、身体部位の慣用メタファーは、限られた数の概念メタファーを縦系に、各部位のメトニミーを横系にして織り上げられた言語作品と言ってもいいだろう

注・引用注

- (1) 『方法序説』『省察』岩波書店、中央公論社、参照。
- (2) アントニオ・R・ダマシオ著、田中三彦訳、『生存する脳～心と脳と身体の神秘～(原題 Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Brain)』、(2000)、講談社。
- (3) 病徴不覚症(anosognosia): 脳卒中や種々の神経学的疾病により、脳の特定期領域の損傷で体系的に起こる症状で、身体の現実に関する直接的自覚の欠如を伴う。
- (4) Piaget, J, *Problèmes de psychologie génétique*, Paris: Denoel/Gonthier, (1972).
- (5) たとえば、Lakoff, George, *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, Chicago: The University of Chicago Press, (1987)を参照のこと。
- (6) 佐藤信夫、『レトリック感覚』、講談社、(1978)。グループμ、『一般修辞学』、大修館書店、(1981)。
- (7) Lakoff, George, and Mark Johnson, *Metaphors We Live By*, Chicago: The University of Chicago Press, (1980).
- (8) 慣用メタファーの根底にあって、概念に一定の構造を付与するメタファーを、概念メタファー(conceptual metaphors)と呼ぶ。表記はすべて大文字で表す。
- (9) 例文の引用文献は、次の通りである。
CIDE: Cambridge International Dictionary of English, Cambridge: Cambridge University Press, (1995).
D: Deignan, Alice, *English Guides 7: Metaphor*, London: Harper Collins Publishers, (1995).
T: 多田幸蔵、『英語イディオム事典[身体句編]』、大修館書店、(1981)。
- (10) たとえば、「風呂をわかす」が実際に意味しているのは、風呂という容器自体ではなく、水(お湯)という容器の中身である。このように、物事の隣接関係に基づき、ある物事を別の物事で指し示す

比喩をメトニミー (metonymy, 換喩) という。一般に、A STANDS FOR B (e.g. A BATHTUB STANDS FOR (BOILED) WATER) と表記する。

- (11) 橋本邦彦、『『目』のメタファー～日本語とモンゴル語の対照研究～』、表現研究第69号、(1999)、p52-60.
Evans, Nicholas, and David Wilkins, "In the Mind's Ear: The Semantic Extensions of Perception," *Language* 76: 3, (2000), p546-592.
- (12) Kövecses, Zoltán, *Emotion Concepts*, Berlin: Springer-Verlag, (1990).
- (13) 英語で miss one's foot 「足を踏みはずす、失脚する」は、否定的な意味で用いられる。

